

## 王逸『楚辭章句』屈賦注における 「離騷」テーマの展開

The Development of *Lisao* Theme in Wangyu's  
Annotation to Qufu in *Chuci Zhangju*

田 宮 昌 子

小稿は、前近代・近現代を通じ、中国文化史において常に正統的位置を占めて来た屈原について、そのイメージ—屈原の名によって象徴される意味世界—を読み解こうとする試みの一環である。屈原の伝承は遅く見ても前漢には既に成立しており、以来現代まで時代による変化や盛衰はあるものの、基本的には絶えることなく行われてきた。このため、屈原は中国文化史の一側面における「変遷の中の継承」を見るに当たっての有効且つユニークな切り口たり得ると思われる。

このように、本研究は屈原イメージの史的変遷を辿ろうとするものであるが、今回は、漢代の屈原像、ひいては後世における屈原像の祖型の把握に繋がる作業として、後漢の王逸『楚辭章句』をとり上げる。『楚辭章句』は、戦国末から前漢を経て後漢に至る楚辞及び屈原理解の集大成であり、そこに示される屈原像は、戦国末以来の屈原像を反映したものとみることが出来る。更に、後世に伝わったものとしては最古の注釈書として楚辞学上に持った位置付けから、『楚辭章句』は屈原像の祖型を後世に提示する作用を常に果たし続けてきた。筆者は、すでに屈原像の核心を成す巻一「離騷經章句」についての検討を終えた。その結果、そこには、王注「離騷」テーマとも言うべき諸テーマがあること、それらのテーマを展開する一連の語彙があることを見出した。小稿は、次段階として、『楚辭章句』巻二から巻七に収められた屈賦の王注において、この「離騷」テーマがどのように展開するのかを考察しようとする。

キーワード：変遷の中の継承、屈原像、祖型、「離騷」テーマ

### 目 次

- |                 |                     |
|-----------------|---------------------|
| I はじめに          | IV 派生テーマ：「登用」をめぐる葛藤 |
| II 王注「離騷」テーマ    | V むすびに              |
| III メインテーマ：「登用」 |                     |

## I はじめに

小稿は、前近代・近現代を通じ、中国文化史において常に正統的位置を占めて来た屈原について、そのイメージ—屈原の名によって象徴される意味世界—を読み解こうとする試みの一環である。屈原は秦による天下統一へと向かいつつあった戦国末期の楚の王族で、その才と徳によって君主に重用されるが、讒言に遭って失脚し、楚の滅亡のあと失意のうちに入水自殺をしたとされる。その作と伝えられる辞賦は後に楚辞という文学ジャンルを形成し、その後の文学伝統に巨大な影響を与えた。更に、辞賦に付随して語られた屈原の名を冠した人格モデルが広く中国文化に与えた影響は計り知れないものである。屈原の伝承は遅く見ても前漢には既に成立しており、以来現代まで時代による変化や盛衰はあるものの基本的には絶えることなく行われてきた。このため、屈原は中国文化史の一側面における「変遷の中の継承」を見るに当たっての有効且つユニークな切り口たり得ると思われる。

屈原という人物とその作とされる辞賦については、二千年以上の鑑賞・批評・研究の歴史があるが、その実在や作品の実作者については多くの議論もある。小稿はこれらの議論には立ち入らない。本研究は、屈原の実像如何や作品自体ではなく、後代の人間によって屈原の名に託された価値を考察対象とする。つまり、本研究は屈原イメージの史的変遷を辿ろうとするものであるが、具体的手法としては、屈原という人物及び“屈原作とされた楚辞”（以下、屈賦<sup>1</sup>）について語る漢代以来の語彙を屈原イメージの媒体として考察対象とする。今回は、まず後漢の王逸『楚辭章句』をとり上げる。

王逸『楚辭章句』は、戦国末から前漢を経て後漢に至る楚辞及び屈理解の集大成であり、その屈原イメージは、戦国末以来の屈原像を反映したものとみることが出来る。更に、その後現在に至るまで後世に伝わったものとしては最古の注釈書として楚辞学上に持った位置付けから、『楚辭章句』における屈原像は、司馬遷の『史記』「屈原傳」のそれと共に、屈原像の祖型を後世に提示する作用を果たし続けてきたと考えられる。筆者は、すでに屈原像の核心を成す巻一「離騷經章句第一」についての検討を終えた<sup>2</sup>。その結果、そこには、王注「離騷」テーマとも言うべき諸テーマがあること、それらのテーマを展開する一連の語彙があることを見出した。小稿は、次段階として、『楚辭章句』巻二から巻七に収められた屈賦—「九歌」「天問」「九章」「遠遊」「卜居」「漁父」の諸篇—の王注において、この「離騷」テーマがどのように展開するのかを考察しようとする。

## II 王注「離騷」テーマ

### 1、経としての「離騷」

さて屈原であるが、筆者は既に他稿で『史記』「屈原傳」は屈原の事跡についての具体的記述に

乏しく、屈賦を取り込むことで伝が成立していること、「離騷」は直接引用されていないが、屈原の苦境の叙述や人物評は当時の「離騷」理解を前提としていることなどを確認した<sup>3</sup>。また、王逸の「離騷」「後序」（この呼称については、次節で詳述）によれば、劉安、賈逵、班固のそれぞれに『離騷經章句』があるが、賈逵、班固が注をつけたのは屈賦 25 篇のうち「離騷」篇のみであった。三書とも佚書であるが、王逸『楚辭章句』に収められている「班孟堅序<sup>4</sup>」は、劉安のものを『離騷傳』と呼んでいる。このように書名の呼称は一定ではなく、これらの書名全てに当初から「經」の字が有ったかどうかは定かではないが、屈原作として伝わっていた辞賦の中で「離騷」が特別重視されたことは確かである。屈原は何よりも「離騷」篇の作者として後世に認知されており、「離騷」無くして屈原の伝承が今日まで行なわれることは無かったであろう。更に、後世の屈原への言及の殆どは屈原を「離騷」の意味世界の主人公として捉えており、屈原イメージの核心には「離騷」がある。

## 2、王逸『楚辭章句』テキストの問題点

王逸『楚辭章句』は、後漢元初年間（114～119 年）に成立したと考えられ<sup>5</sup>、その後宋代に刊版が盛んになるまで約 800 年間の手写を経ているが、この時期の写本で今に残るものは無い<sup>6</sup>。刊本としては最も早期になる宋版『楚辭章句』の実物は今に伝わらず、現存する善本は明代に宋版を翻刻したものである。このような状況からテキストとしては多くの問題が生じるが、ここでは小稿の考察に関わる問題点に絞って以下に整理してみる<sup>7</sup>。

### 1) 『楚辭章句』各篇の序について

現行本『楚辭章句』各篇の前には当該篇の作者や制作状況を述べる序が付されている。これらは楚辞学に於いて長く王逸の手になるものとして理解され、現在に至っているが、異論もある。

例えば、蔣天樞「論《楚辭章句》<sup>8</sup>」や林維純「《楚辭章句》序文作者問題考辨<sup>9</sup>」は、序と注の見解の食い違いを多々列挙して、序と注が同一人物の手になるものとは考えられないこと、「離騷」「後序」中の「臣復た識る所知る所を以て、之を舊章に稽<sup>かんが</sup>へ、之を經傳に合せ、十六卷の章句を作る」に拠り、注文が王逸によるものとされることから、序は別人の手になるものと指摘している。

この問題に関しては、以下のような見解がある。まず、『楚辭章句』の性質や成立過程の理解に関わることであるが、王逸は戦国以来の楚辞文芸伝承（辞賦＋序＋注）の集大成者であり、王逸の楚辞解釈は王個人の創見ではなく、先行する楚辞文芸の伝承が王逸に受容され、序や注に結晶したものであり、『章句』における序と注の記述に多くの矛盾があるのはこの為であると説明する<sup>10</sup>。また、宮野直也「王逸『楚辭章句』の注釈態度について<sup>11</sup>」も、序文は王逸という前提（但し論文中では未検証）の上で、序と注の食い違いの理由を『楚辭章句』の性質から来るものとして説明している。曰く、王逸は、賈誼「惜誓」や東方朔「七諫」など、作者が屈原でないことがはっきりしている漢代の楚辞についても屈原の自述として注している。王逸のこの注釈態度は漢代

経学を踏まえて考えるべきであって、その視点から見れば、『楚辭章句』は卷一の「離騷」を経とし、以降卷十六までの諸篇を「離騷」の経義を闡明するための伝として編集したものである。王逸の注は本文が持つ特定の時代性を捨象し、類型化普遍化を行なおうとしており、各篇の個別具体的な作者や制作状況を意図的に排除している。その中で懐王と屈原は暗君と忠臣の組合せとして類型化されているのであると言う。

また、「離騷」篇の前後に付される序について、前の序を「離騷」序、後ろの序を『楚辭章句』序とする研究者も少なくない<sup>12</sup>。林前掲論文は、序の内容からそう考えるのが妥当とした上で、篇の前後に序が置かれているのは、古代の巻物式書籍において序が本文の後ろに置かれていた痕跡を留めているものと説明する。小南氏は、現行本『楚辭章句』には各巻頭に「校書郎臣王逸上」の題辞がある版があることを踏まえ、『楚辭章句』は校書郎として任官中に勅命を受けたものであり、後序は『章句』を献上した時の上奏文ではないかと推測している。更に、後者は「今臣…十六卷の章句を作る」の下りから王逸のものとするに異論は無いが、前者については林前掲論文などが別人の手になる可能性を指摘する。これに対し、小南氏は「前序」の文体が注釈の文体と一致することを指摘して、王逸の手になる可能性が高いと推論している<sup>13</sup>。

以上の議論を踏まえた上で、小稿は、まず「離騷」前後の序文については、ひとまずそれぞれ「前序」「後序」と呼ぶこととする。「離騷」前後の序について、「離騷」序『楚辭章句』序とする説はいまだ推論に過ぎないが、少なくとも現行本では卷一「離騷」篇の前後に「序」があることは確かであるからである。

その他の序については、小南氏は、「離騷」「後序」中に王逸が言う「今臣…十六卷の章句を作る」が序の執筆を含むとは断定できず、序が誰の手になるかを明示する記録は無いとした上で、先行する楚辭文芸の伝承を受容した上での王逸の序とする考えを示している。しかし、「今臣…十六卷の章句を作る」の「章句」が序文を含むとは断定できないのは確かであり、その他に序の作者を明示する資料も無い。このため、小稿では王逸序ではなく、単に序と呼称する。

## 2) 『楚辭章句』各篇の注について

王逸が楚辭文芸の伝承を集大成したものが『楚辭章句』であるとするなら、注文中の楚辭文芸伝承と王逸自身の見解はどう区別するのか、或いはそれぞれの割合はどの程度なのか、という問いがある。これらは全て、果たして注文は王逸注なのかと問うものだろう。

これらの問題について、小稿は既に何度か言及した「離騷」後序「今臣…十六卷の章句を作る」から『楚辭章句』注文は王逸の手になるものであり、その上でその内容が先行する解釈を受容し、取捨選択した上で王逸の見解を加えたものであることは当然であり、「集大成」とはそういうことであると考え。小稿では『章句』の注を以上の意味において「王注」と呼称する。

また、長い手写・版刻の繰り返しのうちに、注文の文字や字句に生じる異同の問題や後世の加筆と王注との混同などの問題も指摘されている<sup>14</sup>。前者については、小稿では作業のもととなる版本を明示することで対処したい。小稿は検索作業を『文淵閣四庫全書電子版』で行ったため、

字句の異同については、基本的には『文淵閣四庫全書』版に依拠することとする。後者については、加筆が指摘される字音および異文は、以下に示すように、小稿の考察対象とならないため、小稿の考察に影響を与えることはないとする。

### 3、王注「離騷」テーマ析出作業

まず、「離騷」王注をテキストとして読み込む作業を行った。そこに正反相対立する価値と両者の葛藤があることは容易に読み取れるが、双方の価値を象徴する人名・抽象概念・特徴的文型（被害を表す受身形など）等を分類する作業を経て、「離騷」王注に見られる幾つかのテーマが浮かび上がってきた。次に、これら諸テーマを展開している特徴的語彙を「離騷」本文と王注それぞれで検索し、全ての出例を拾い出した<sup>15</sup>。この時点での出例を「単純出例」とし、ここからテーマ以外での出例を除外する選別作業を行った。例えば、「登用」テーマの〈用〉では、「官職につける」「臣下とする」という用例に限り、単なる「用いる」等その他の用例は除外した。〈君〉〈臣〉〈忠〉〈賢〉〈佞〉〈讒〉には基本的に除外例はない。このように、「単純出例」から当該テーマでの出例に絞り込んだものを「該当出例」とする。この過程で検索語彙の絞り込みも行った。例えば、「清潔」テーマでは、政治倫理上の「きよさ」「潔癖さ」をめぐる王注の叙述から拾い出した語彙グループ〈清〉〈潔〉〈白〉〈明〉〈浄〉〈香〉で検索を行ったが、最終的には〈清〉〈潔〉二字に絞り、テーマ名を「清潔」とした。最終的に各テーマの検索語彙は次章において順次示す通りとなった。最後に、各篇王注の総字数を母数として該当出例の「出例頻度」を出した。各篇の長短が異なるため、出例数だけでは意味を成さないためである。諸テーマ語彙の王注における出例状況の詳細は巻末の表に示す通りである。

以下、順次これら「離騷」諸テーマを説明しながら、巻二から巻七に収められた屈賦王注に於いて、「離騷」諸テーマがどのような展開をみせるかを見ていく。各テーマの出例を挙げるに当たっては、論述の順に番号を付し、「」を付して本文を、続いて王注を原文（訓）の順で示す。論文中に〈〉で示すのは、検索語彙及び原文として取り上げる場合である。

### Ⅲ メインテーマ：「登用」 検索語彙：〈用〉〈進〉〈事〉

「已矣哉國無人莫我知兮」…我獨り徳を懐くも用ひられざるは、楚國賢人有りて、我が忠信を知る無きを以ての故なり…。

「離騷」前序は、屈原が「離騷」を制作した動機を「君の覺悟して正道に反り、己れを還すを冀ふ也」とする。「離騷」は、君が非を悟り、自分を召し戻すことを願うものだというのである。既に述べた理由から、小稿は「前序」を王逸序とすることは保留するが、王注には、これから示すように忠臣の君への訴えとして「離騷」を読む姿勢が顕著である。更に、君が賢臣忠臣を登用

すること、その結果として賢人が<位>を得ることが関心の中心となっており、「前序」が「離騷」の訴えの核心に臣として登用されることがあるとするのと相通じている。かくして、「登用」が王注「離騷」世界のメインテーマとして浮上する。上記の検索語彙の出例を分類・検討して、以下に示す五つのサブテーマ<sup>16</sup>を得た。

### (一) 君への訴え

王注「離騷」世界の中心には、「登用」を求めての君への訴えがある。その訴えは更に以下の三つに分類できる。

#### (1) 忠言

「固衆芳之所在」夏禹、殷湯、周文王の能く…聖明の稱有る所以は、皆な衆賢を擧用して、顯職に在らしむるの故に、道化興りて、萬國寧する也。

まず、「賢臣を登用すれば」と君にその効用を説く。賢臣の補佐を得れば世が治まる、世が治まれば明君たれるのであって、古の聖王が聖王たる所以も「賢人を登用したから」であると説く。

#### (2) 戒め

「何桀紂之昌被兮夫唯捷徑以窘步」桀紂は愚惑にして天道に違背し、施行惶遽なり。…故に身は陷阱に觸れ、滅亡に至る。法を以て君を戒むる也。

次に、「賢人を登用しなければ」どうなるか、と君を戒める。「離騷」本文中の君名臣名が「登用」を中心に読まれ、堯舜となるか桀紂となるか、君の位にある者の成敗を決するものとして、「賢を擧げ能を任ず」を繰り返し説く。

#### (3) 「登用」の願い<sup>17</sup>

「時亦猶其未央」己れ汲汲として君を輔佐せんと欲する所以の者は、年の未だ晏晩たらざる<sup>18</sup>に及んで、以て徳化を成さんことを冀ふ也…三賢の遭遇の若きを冀ふ也。

王逸は、「離騷」本文に賢君が賢臣を見出す伝承が列挙されるのに注して、修養を積んで賢君に見出されるのを待つことを説く。このように「汲汲として君を輔佐せんと欲する所以」は、「徳化を成す」、つまり理想の政治を世に行うためであり、そのためには、三賢人のように賢君に見出されて、その臣下とならなければならない。

#### (屈賦王注における展開)

この「離騷」テーマ「君への訴え」について、屈賦王注での展開を見てみると、君の徳および徳の具現としての賢人の「登用」と君位の安泰とを結びつけ、君に一種の戒めを加えるような説き方が見られる。

①巻四「九章」「涉江」「吾又何怨乎今之人」言自古有迷亂之君、若紂夫差、不用忠信、滅國亡身…。(古より迷亂の君、紂・夫差が若き有り、忠信を用ひずして、國を滅し身を亡す)

②巻四「九章」「悲回風」「更統世而自貶」…言己<sup>19</sup>念懷王長居郢都、世統其位、父子相繼、今

不任賢、亦將危殆也。（己れ懷王長く郢都に居りて、世に其位を統べ、父子相繼ぐも、今賢を任ぜず、亦た將に危殆せんとするを念ふ也）

しかし、君への訴えの中心となるのは、「『登用』の願い」である。卷四「惜誦」では、「天に登ること」の難しさを「登用」が叶うことの難しさに解く。

③卷四「九章」「惜誦」「日有志極而無旁」…言厲神為屈原占之曰、人夢登天無以渡、猶欲事君、而無其路也、但有勞極心志、終無輔佐。（厲神屈原が為に之を占ひて曰く、人天に登るを夢みて以て渡る無きは、猶ほ君に事へんと欲して其の路無きがごとき也。但だ勞有りて心志を極め、終に輔佐無し）

このように賢君を得ること、つまり「登用」を願うのは、やはり理想政治を行うためである。

④卷五「遠遊」「張樂咸池奏承雲兮」…屈原…乃使仁賢、若鸞鳳之人、因迎貞女、如洛水之神、使達己於聖君、德<sup>20</sup>若黃帝・帝堯者、欲與建德・成化・制禮・作樂、以安黎庶也。（屈原…乃ち仁賢の鸞鳳が若きの人をして、因りて貞女の洛水の神が如きを迎へしめ、己れを聖君の徳は黃帝・帝堯が若き者に達せしめ、與に徳を建て、化を成し、禮を制し、樂を作り、以て黎庶を安せんと欲する也）

そして、退けられてもなお、君に召し戻されることを願う。

⑤卷二「九歌」「湘君」「遺余佩兮澧浦」…言己雖見放逐、常思念君、設欲遠去、猶捐玦佩、置於水涯、冀君求己、示有還意。（…己れ放逐されると雖も、常に君を思念す。設し遠く去らんと欲すとも、猶ほ玦佩を捐て、水涯に置く。君の己れを求むるを冀ひ、還意有るを示す）

## （二）臣としての賢人 検索語彙：＜君＞＜臣＞

「衆女嫉余之蛾眉兮」衆女は衆臣を謂ふ也。女は陰也。專擅無きの義なり。猶ほ君の動きて臣の随ふがごとき也。故に以て臣に喩ふる也。

春秋戦国期には、賢人は、諸侯に仕えると言っても一応その＜賢＞や＜能＞をもって師として迎えられる形をとるのであって、例えば、『論語』衛靈公篇・微子篇などに見える、孔子がその国を去るエピソードが示すように、賢人として、為政者に対し相対的に独立した姿勢を保とうとしている。しかし、秦以降の天子一尊の天下では、もはや賢人も君を選択する<sup>21</sup>ことは出来ず、（出仕しない道もあるものの）明確に上下関係として規定された君臣関係における臣下として君上に仕えることになる。

「前序」は、「善鳥香草以て忠貞に配し、惡禽臭物以て讒佞に比し、靈修美人以て君に嬾し、宓妃佚女以て賢臣に譬へ、虬龍鸞鳳以て君子に託し、飄風雲霓以て小人と為す」として、「離騷」中に描写される事物を、正邪・上下・優劣を表わす三対の人間類型の象徴として類型化している。これが王注に基づく第三者の概括なのか、或いは王逸の「離騷」注釈に当たっての方針を示すものなのかは不明であるが、「離騷」王注はまさにこの三対の類型に拠っている。＜君＞と＜臣＞は、そのうちの上下の一対である。

こうして、「離騷」本文に比して王注においては、先秦以来の賢人がとるべき出处進退の伝統(後述)に混じって、賢人の臣下としての側面が強く出ている。

(屈賦王注における展開)

卷二以降においても、王注に現れる屈原及び賢人の位置付けは、賢君あつてのものである。いかなる賢人といえども、賢君に見出され、臣下として「登用」されて<位>にあるのでなければ、理想を実現することは出来ない。

⑥卷四「九章」「惜誦」「吾誼先君而後身兮」…夫君安則己安、君危則己危也。(夫れ君安んずれば則ち己れ安んじ、君危ふければ則ち己れ危ふき也)

⑦卷四「九章」「懷沙」「伯樂既歿兮驥將焉程兮」…以言賢臣不遇明君、則亦無所施其智能也。(賢臣明君に遇はざれば、則ち亦た其の智能を施す所無し)

本文中に詠まれる様々な事象を王注は君臣関係に解する。そこに注者の「登用」への強い関心、君臣関係の規定のありようを見ることが出来る。本節(二)の冒頭に挙げた「離騷」王注「猶ほ君の動きて臣の随ふがごとき也」に典型的に見られるように、王注における君臣関係への言及では、君は能動、臣は受動である。ここから自ずと陰陽への対応も定まる。万物の根源である陰陽への対応が定まれば、注者が主従関係を見出す全ての事象に君臣関係を当てることが可能となる。

・陰陽

⑧卷四「九章」「涉江」「陰陽易位時不當兮」陰臣也、陽君也…。(陰は臣也、陽は君也)

・男女

⑨卷二「九歌」「湘君」「心不同兮媒勞」言婚姻所好、心意不同、則媒人疲勞而無功也、屈原自論、行與君異、終不可合、亦疲勞而已也。(婚姻の好む所は、心意同じからざれば、則ち媒人疲勞するも功無き也、屈原自ら論ふ、行ひ君と異なり、終に合ふべからず、亦た疲勞するのみ也と)

・自然

⑩卷四「九章」「涉江」「雲霏霏而承宇」…或曰、日以喻君、山以喻臣、霰雪以興殘賊、雲以象佞人…。(日は以て君に喻へ、山は以て臣に喻ふ。霰雪は以て殘賊に興し、雲は以て佞人に象る)

・車馬

⑪卷四「九章」「思美人」「車既覆而馬顛兮」…車以喻君、馬以喻臣、言車覆者國君危也、馬顛仆者所任非人。(車は以て君に喻へ、馬は以て臣に喻ふ。言ふところは、車覆へるは國君危き也、馬顛仆するは任ずる所人に非ず、と)

そして、臣としてその君に一途な思いを寄せる。

⑫卷二「九歌」「湘君」「隱思君兮陴側」…言己雖見放棄、隱伏山野、猶從側陋之中、思念君也。

(己れ放棄されると雖も、山野に隱伏し、猶ほ側陋の中より、君を思念する也)

⑬卷四「九章」「惜誦」「惜誦以致愍兮」…言己貪忠信之道、可以安君、論之於心、誦之於口、



至於身已疲病而不忘。（己れ忠信の道を貪り、以て君を安んずべし、之を心に論じ、之を口に誦し、身已に疲病するに至るも忘れず）

以上から、君臣という上下関係における臣“下”としての立場が、王注のメインテーマを「登用」とする基盤であることが分かる。

### （三） 在位 検索語彙：〈位〉

「各興心而嫉妬」在位の臣、心は皆な貪婪にして、内に其志を以て他人を恕度す。己れと同じからざれば、則ち各嫉妬の心を生じ、清潔を推棄して、用ひらるるを得ざらしむ。

王注は、臣下として登用されている状態を〈在位〉と表現する。「離騷」本文には〈位〉の出例はなく、王注の「登用」の関心がどこにあるかを示すものといえる。〈位〉は、後に見る「忠佞の対立」における究極の争点である。〈忠〉は「登用」をめぐる敗れた側であり、「離騷」王注では、〈在位之臣〉〈在位之人〉は〈忠賢〉と対立する〈讒佞〉の代名詞にさえなっている。

（屈賦王注における展開）

屈賦においても、王注の〈位〉への言及からは、賢人が理想を実現するために「登用」を願うこと、その「登用」は〈位〉を意味するという、「登用」に際しての〈位〉へのこだわりを見ることが出来る。

⑭卷四「九章」「懷沙」「孰察其撥正」…以言君子不居爵位、衆亦莫知其賢能也。（君子爵位に居らざれば、衆亦た其賢能を知る莫し）

〈位〉を失う、得られないということが意味する状態とそれへの〈衆〉の反応が、〈位〉へのこだわりを引き起こす。

⑮卷四「九章」「懷沙」「矇瞶謂之不章」…持賢知之士、居於山谷、則衆愚以為不賢也。（賢知を持するの士も山谷に居らば、則ち衆愚以て不賢と為す）

そして、次節で見ると、〈位〉に就いているのは、やはり〈讒佞〉の側であり、〈忠賢〉は敗者である。

### （四） 否定形…敗者としての賢人

「唯昭質其猶未虧」我外には芬芳の徳有りて…施用せらるるを得ず…。

屈原、或いはそれに同化して「離騷」を読む「己れ」は、「登用」のテーマにおいて敗者の側にある。このため、「登用」テーマの語彙は否定される形をとることが多い。

（屈賦王注における展開）

屈賦王注においても、「己れ」は「登用」において敗者の側にあり、そうであることが〈忠賢〉の証左のようになっている。

⑯卷四「九章」「懷沙」「曾傷爰哀永歎喟兮」…言己所以重傷、於是歎息自恨、懷道不得施用也。

（己れ重ねて傷み、是に於いて歎息自恨する所以は、道を懐きて施用せらるるを得ざる也）

⑰卷四「九章」「悲回風」「竊賦詩之所明」…言己守高眇之節、不用於世…。(己れ高眇の節を守れども、世に用ひられず)

そして、その結果として「去」という選択肢が浮上する。

(五) 去一國を去る、君を去る 検索語彙：〈去〉

「懷朕情而不發兮余焉能忍與此終古」我忠信の情を懐くも、發用せらるるを得ず。安んぞ能く久しく此の闇亂の君と終古にして居らんや。意は復た去らんと欲する也。

賢人がその理想を世に行うためには、己れを認め用いてくれる君を得なければならない。君が賢君でなく、国に道が行われない時、賢人はその国を去って、天下に賢君を求めるべきである。それが古の賢人のとるべき「出處進退」の道であった。

(屈賦王注における展開)

「離騷」王注における〈去〉は、上に示す出例のように、仕えるべき君を選ぶという、言うなれば積極的〈去〉であるが、屈賦王注では少しく様相が異なる。積極的〈去〉は影をひそめ、君に退けられることを〈去〉と表現する、言わば消極的〈去〉とでもいうべき〈去〉が前面に出てくる。そして、その〈去〉を悲しむ。

⑱卷四「九章」「涉江」「齊吳榜以擊汰」…言己始去…自傷去朝堂之上、而入湖澤之中也…。(己れ始め去りて…自ら朝堂の上を去りて、湖澤の中に入るを傷む也)

⑲卷四「九章」「哀郢」「甲之鼃吾以行」…屈原放出郢門、心痛而思、始去、正以甲日之旦而行、紀時日清明者、刺君不聰明也。(屈原郢門より放出せられ、心痛して思ふ、始め去るに、正に甲日の旦を以て行く。時日を紀するの清明なるは君の聰明ならざるを刺る也)

#### IV 派生テーマ：「登用」をめぐる葛藤

メインテーマからは、また幾つかの派生テーマが生じているが、主要な五テーマを取り上げて見ていく。

(一) 忠佞の対立

「登用」をめぐるのは、君の信任とそれによって得られる〈位〉をめぐる臣臣間に対立・葛藤が発生する。既にみたように、王注は「離騷」本文中の植物や鳥獸などの表現を、この「登用」をめぐる臣臣間の対立の象徴として読む。「善鳥香草以て忠貞<sup>22</sup>に配し、惡禽臭物以て讒佞に比す」である。これが王注の中心的対立軸となる。

検索語彙：〈忠〉〈賢〉

「謇吾法夫前修兮非世俗之所服」我忠信謇謇たるは、乃ち上は前世の遠賢に法る。

「離騷」王注において〈忠〉が形成する熟語は、出例数の多い順に、〈忠信〉〈忠直〉〈忠正〉

<忠貞><忠誠>。ここから忠賢の側の徳の中身を見ることが出来る。一方、<賢>は<賢>一字の出例が最も多い。その場合、<害賢><求賢><挙賢>…というように、目的語になっている例が殆どを占める。この場合の<賢>は、<賢人><賢士><賢臣>…など王注に登場する<賢>なる人々を指す語彙に相当すると見てよいだろう。こうしてみると、これら<賢>なる人々が備える徳を示すのが、<忠>が形成する語彙であるといえる。右に挙げた王注「我忠信譽譽たるは、乃ち上は前世の遠賢に法る」には、この<忠><賢>の意味関係が典型的に表われている。

検索語彙：<佞><讒>

「倚閭闔而望予」己れ賢を求めて得ず。讒を疾み佞を惡む。

「離騷」王注において、<佞>と<讒>は、結合して<讒佞>の形で用いられる例が<佞><讒>双方において最も多く、<讒佞>で<忠賢>に対立する人間類型を表わすと考えられる。上に挙げた「讒を疾み佞を惡む」という出例はこのことを裏付ける。しかし、相対立する価値を持つ二つの語彙グループのうち、一語として結びついて正邪の人間類型を示すのは<忠佞>のみであり<sup>23</sup>、<忠>と<佞>がそれぞれの価値を代表する語（概念）であると言える。「忠佞の対立」と名づける所以である。

（屈賦王注における展開）

卷二以降においても、<佞><讒>双方において<讒佞>の出例が最も多い。⑳注のように<讒>を<佞>で解く出例があり、<佞><讒>の意味は基本的には同じと見ることが出来る。

⑳卷四「九章」「惜往日」「使讒諛而日得」佞人位高、家富饒也。（佞人位は高く、家は富饒也）

しかし、より詳細に見れば違いはあり、次の㉑注では、<佞><讒>が一つの注の中で別々に説かれている。

㉑卷二「九歌」「山鬼」「雷填填兮雨冥冥猿啾啾兮夜鳴風颯颯兮木蕭蕭」…雷為諸侯以興於君、雲雨冥昧以興佞臣、猿猴善鳴以興讒人、…雷填填者君妄怒也、雨冥冥者羣佞聚也、猿啾啾者讒夫弄口也…。（雷は諸侯為り、以て君に興す。雲雨は冥昧たり、以て佞臣に興す。猿猴善く鳴く、以て讒人に興す。…雷填填たるは君妄に怒る也。雨冥冥たるは羣佞聚まる也。猿啾啾たるは讒夫口を弄する也）

この㉑注では、本文の自然界の描写を人間界の政治世界の比喩として読んでいる。群れる「佞臣」は「冥昧」であるために「雲雨」に比せられる、口を弄する「讒人」は「善鳴」であるために「猿猴」に比せられているとする。この出例が示すように、<佞>が正邪の邪の側をより広く指すのに対し、<讒>は讒言を行うことが核心にある。<人><臣>は、<佞><讒>双方と結びついて熟語を形成するが、<言>と結びつくのは<讒>のみである。讒言の害への言及は当然多い。これが次節で見る「忠賢の受難」に繋がっていく。

㉒卷四「九章」「惜誦」「故衆口其鑠金兮」…言衆口所論、萬人所言、金性堅剛、尚為銷鑠、以喻讒言多使君亂惑也。（衆口の論ずる所、萬人の言ふ所、金性堅剛たるも、尚ほ為に銷鑠す、

以て讒言多く君をして亂惑せしむるに喩ふる也)

<忠佞>は、屈賦においても、最も基本的な相対立する価値であって、葛藤の源泉である。

㉓卷四「九章」「惜誦」「九折臂而成醫兮吾今而知其信然」…原被放棄、乃信知讒佞為忠直之害也。(原放棄せられ、乃ち信に讒佞の忠直の害為るを知る也)

㉔卷四「九章」「悲回風」「故荼苦不同晦兮」…以言忠佞亦不同朝而俱同立也。(忠佞も亦た朝を同にして俱に同立せず)

そして、<忠佞>の対立は、やはり君の信任をめぐるものであり(㉓注)、その信任の先にあるのは「登用」、そして<位>である(㉔注)。

㉕卷二「九歌」「東皇太一」「君欣欣兮樂康」…屈原…自傷履行忠誠、以事於君、不見信用、而身放逐、以危殆也。(屈原…自ら忠誠を履行し、以て君に事ふるも、信用せられず、而して身は放逐せられ、以て危殆たるを傷む也)

㉖卷四「九章」「涉江」「哀吾生之無樂兮」遭遇讒佞、失官爵也。(讒佞に遭遇して、官爵を失ふ也)

## (二) 忠賢の受難

「恐嫉妬而折之」楚國の人、忠信の行ひを尚ばず。其れ我が正直を嫉妬し、必ずや折挫して、之を敗毀せんと欲す。

「忠佞の対立」において、加害行為は<佞>から<忠>に対してのみ行われる。ここから「忠賢の受難」が引き起こされる。

(屈賦王注における展開)

前節で述べたように、<佞>が行う害として具体的に現れるのが讒言である。讒言は君を「亂惑」(㉗注)させ、忠賢の「疏遠」(㉘注)「放逐」をもたらす。讒言によって「放逐」するのが「讒逐」(㉙注)、死に追い込むのが「讒殺」(㉚注)である。

㉗卷二「九歌」「湘君」「期不信兮告余以不聞」…言君嘗與己期、欲共為治、後以讒言之故、更告我以不聞暇、遂以疏遠己也。(君嘗て己れと期し、共に治を為さんと欲するも、後に讒言の故を以て、更めて我に告ぐるに聞暇あらざるを以てし、遂に以て己れを疏遠する也)

㉘卷三「天問」「何感天抑墜夫誰畏懼」言驪姬讒殺申生、其冤感天、又讒逐羣公子…。(驪姬、申生を讒殺するや、其の冤は天を感ぜしむるも、又た羣公子を讒逐す)

## (三) 不遇 検索語彙：<遇><遭><sup>24</sup>

「哀朕時之不當」自ら生れて舉賢の時に当たらず、菹醢の世に値るを哀しむ。

<忠賢>は<忠賢>であるがために難にあう運命にある。「不遇」—ふさわしい時、賢君の治世に「めぐり遇えない」こと—への嘆きが「離騷」テーマの通奏低音として流れている。「不遇」のテーマにおいては、往々にして理想は否定形で、現実は逆に肯定形で語られる。そのふさわしい時、

賢君の治世に行われるはずの理想の内容は、〈舉賢〉（賢人の登用）であって、ここにもメインテーマの関心が貫かれている。

（屈賦王注における展開）

屈賦においても、嘆かれる現実が肯定形で、めぐり遇うべき理想が否定形で語られる。理想と現実とは治世と君の二面から捉えられ、現実は〈暗（闇）〉〈亂〉〈濁〉などの語で、理想の方は〈明〉〈聖〉などの他に、〈堯〉〈舜〉など具体的な〈聖主〉（㉑注）の名で表現される。

㉑ 卷二「九歌」「湘夫人」「目眇眇兮愁余」…屈原自傷不遭堯舜、而遇闇君…。（屈原自ら堯舜に遭値せざりて、闇君に遇ふを傷む）

㉒ 卷四「九章」「涉江」「陰陽易位時不當兮」…言楚王惑蔽、權臣將代君、與之易位、自傷不遇明時、而當暗世。（楚王惑蔽たり。權臣將に君に代はりて、之と位を易へんとす。自ら明時に遇はずして、暗世に當たるを傷む）

㉓ 卷四「九章」「思美人」「遭玄鳥而致詒」…屈原亦得天地正氣而生、自傷不遭聖主、而遇亂世也。（屈原亦た天地の正氣を得て生る。自ら聖主に遭はず、而して亂世に遇ふを傷む也）

㉔ 卷五「遠遊」「二女御九韶歌」…屈原自傷不值於堯、而遭此濁世、見斥逐也。（屈原自ら堯に値はず、而して此の濁世に遭ひ、斥逐せらるるを傷む也）

（四）孤高 検索語彙：〈衆〉〈獨〉

「判獨離而不服」衆人皆な賡・衰・臬耳<sup>25</sup>を佩び、讒佞の行ひを為し、朝廷に満ちて、富貴を獲。汝は獨り蘭蕙を服し、忠直を守りて、判然として離別し、衆と同じからず。故に斥棄せらるる也。

「忠佞の対立」の展開の中では、〈不同〉〈不合〉〈異〉という概念が重要な働きをしており、否定形で〈不與衆同〉（衆と同じからず）、或いは〈不與衆合〉（衆と合はず）、または肯定形で〈與衆異〉（衆と異なる）などの表現が繰り返されて、〈衆〉という存在がクローズアップされる。「離騷」王注に現れる〈衆～獨～〉という印象的な構文は、「漁父」中の「世を舉げて皆な濁り、我れ獨り清めり。衆人皆な酔ひ、我れ獨り醒む」〈舉世皆濁、我獨清。衆人皆醉、我獨醒〉を否応なく想起させる。「離騷」王注で〈衆～獨～〉の構文を持つ出例を見てみると、右の出例に見るように、〈衆〉と〈獨〉は、明らかに正邪の価値と対応しており、双方の属性を見ると、「忠佞の対立」そのものである。しかし、〈忠佞〉が正邪の対立であるのに対し、〈衆～獨～〉は多寡の関係にある。〈獨〉<sup>ひびり</sup>ただしいために、孤立・不遇をかこち、排斥される。これが〈不與衆同〉が「受難」を引き起こす所以である。上に挙げた「判獨離而不服」の王注は、この「孤高」のテーマを集約した典型例と言える。その〈衆獨〉の構造を表に示してみると次のようになる。

	主語	多寡	外面・装い	内面・倫理	社会的状況	世俗的結果
衆	衆人	皆な	(悪草)を佩ぶ	讒佞の行を為す	朝廷に満つ	富貴を獲
獨	汝	獨り	(香草)を服す	忠直を守る	離別して 衆と同じからず	斥棄せらる

## (屈賦王注における展開)

屈賦においても、孤高の境地を漂わせる出例が卷三を除く各篇に見られる。中でも、以下の出例には、孤立を引き起こす要因、その孤立の様、そこから引き起こされる受難の三要素が出揃っている。㉓注では本文の〈衆人〉が〈在位之臣〉と注され、㉔注は〈招禍〉の要因を〈親近君側〉という願望で解く。ここからも「登用」をめぐる葛藤が対立の源泉であることを見ることが出来る。

㉓卷四「九章」「惜誦」「羌衆人之所仇」…言在位之臣、營私為家、己獨先君後身、其義相反、故為衆人所仇怨。(在位の臣、私を營みて家の為めにす。己れ獨り君を先んじ身を後にす。其の義相ひ反す。故に衆人の仇怨する所と為る)

㉔卷四「九章」「惜誦」「有招禍之道」…言己疾惡讒佞、欲親近君側、衆人悉欲來害己、有招禍之道、將遇咎也。(己れ讒佞を疾惡し、君側に親近せんと欲す。衆人悉く來りて己れを害さんと欲す。招禍の道有りて、將に咎に遇はんとする也)

屈賦王注には〈衆〉の字義解説が二ヶ所あるが、〈羣〉〈兆〉と解くのみであり、多寡の多を言うだけである。しかし、次に挙げる出例のように、本文の意境を説く部分では、群れる〈衆〉は〈俗〉と同義に解かれている。

㉕卷四「九章」「懷沙」「邑犬羣吠兮吠所怪也」…以言俗人羣聚毀賢智者、亦以其行度異、故羣而謗也。(俗人羣聚して賢智を毀るは、亦た其の行度の異なりたるを以て、故に羣れて謗る也)

㉖卷四「九章」「懷沙」「固庸態也」…徳高者不合於衆、行異者不合於俗、故為犬之所吠、衆人之所訕也。(徳高き者は衆に合はず、行ひ異なる者は俗に合はず、故に犬の吠ゆる所、衆人の訕る所と為る也)

群れる〈衆〉に対し、孤立する〈獨〉。その状況を支える矜持が「孤高」のテーマを形成し、次に見る「清潔」のテーマを導く。

## (五) 清潔 検索語彙：〈清〉〈潔〉

「長顛頤亦何傷」己れ清潔を飲食して、誠に我が形貌をして、信にして美好、中心をして、簡練にして道要に合はしめんと欲す…何者、衆人苟も財利に飽かんと欲し、己れ獨り仁義に飽かんと欲する也。

王逸の屈原評は「此れ誠に絶世の行、俊彦の英なり」(「後序」)という絶賛であるが、このような評価をもたらすのは、「忠貞の質を膺き、清潔の性を體し」という、屈原の人格への強い共感・

賛美である。このような屈原像を受けて、「離騷」王注には、けがれへの強い拒否感、「清潔」へのこだわりが顕著にみられる。「登用」がメインテーマであるとする、このテーマは諸テーマをひたす全体のムードを形作り、「清潔」の象徴として解される、本文中の数々の香草や花・露・月光などのイメージと響きあって、その「離騷」世界に独特の香気を与えている。

「清潔」のテーマの展開を追ってみると、まず“きよめる”行為が目につく。それは直接的に汚れを落とす行為として現れることもあるが、多くは香草や玉石などを食したり、身に帯びることによって、「清潔」を保ち、増す形をとる。或いは飲食・衣服・環境などの外在の「清潔」で、徳・志・節操といった内在の「清潔」を象徴させている。

上に挙げた出例の本文「長顔頰亦何傷」はその前にある句「朝飲木蘭之墜露兮、夕餐秋菊之落英」を受けたものである。王逸はこれを「清潔を飲食す」と注し、「形貌」と「中心」、つまり内外両面の美質を増すものとする。その後、王注は「衆人…財利に…、己れ獨り…仁義に…」と続くことから、「清潔」は「孤高」のテーマの〈獨〉の側、つまり〈忠賢〉の属性であることが分かる。とすれば、「清潔」であることは、〈忠賢〉であることそのものであり、「清潔」であることが、ここまでみて来た「対立」「受難」「不遇」「孤高」のテーマと関連しながら、「敗者」である〈忠賢〉の誇りに結びつくことが窺える。

（屈賦王注における展開）

屈賦王注では、まず巻二が目をつく。巻二本文に〈清〉〈潔〉の出例は1件もないが、本文中の神々の行為 — 沐浴したり、泉水を飲んだり、花々や香草玉石などを身に佩ぶる — に、王注は〈清〉〈潔〉の価値を与える。とはいえ、それらの多くは⑳注㉑注に見るように、政治倫理上の「清潔」の意味を明確に持たせるまでには至っておらず、「離騷」テーマの該当例とするには問題があるようにも見える。しかし、「きよめる」「美しくする」手段が「離騷」テーマと同じであること、内面の浄化に繋がる方向での好ましさを言うものであることから、㉒注のような、屈原の政治倫理上の「清潔」と結びつける読み方と地続きであると見る。

㉑巻二「九歌」「雲中君」「浴蘭湯兮沐芳華采衣兮若英」…言己將修饗祭、以事雲神、乃使靈巫、先浴蘭湯、沐香芷、衣五采華衣、飾以杜若之英、以自潔清也。（己れ將に饗祭を修めて、以て雲神に事へんとす。乃ち靈巫をして、先ず蘭湯に浴し、香芷に沐し、五采の華衣を衣て、飾るに杜若の英を以てせしめ、以て自ら潔清する也）

㉒巻二「九歌」「少司命」「晞女髮兮陽之阿」…言己願託司命、俱沐咸池、乾髮陽阿、齋戒潔己、冀蒙天祐也。（己れ願はくは司命に託し、俱に咸池に沐し、髪を陽阿に乾し、齋戒して己れを潔めん。天祐を蒙むるを冀ふ也）

㉓巻二「九歌」「山鬼」「折芳馨兮遺所思」所思、謂清潔之士、若屈原者也。言山鬼修飾衆香、以崇其善。屈原履行清潔、以厲其身。神人同好、故折香馨相遺、以同其志也。（思ふ所は清潔の士、屈原が若き者を謂ふ也。言ふところは、山鬼は衆香を修飾し、以て其の善を崇ぶ。屈原は清潔を履行し、以て其の身を厲む。神人好を同にす、故に香馨を折りて相ひ遺り、以て

其の志を同にする也)

注目すべきは、自らが「きよい」、或いは自らを「きよめる」のではなく、讒佞を「きよめる」という「離騷」王注では見られなかった「清」が登場することである。

④卷四「九章」「悲回風」「隱岷山以清江」…言己雖遠遊戯、猶依神山而止、欲清澄邪惡者也。(己れ遠く遊戯すと雖も、猶ほ神山に依りて止まり、邪惡を清澄せんと欲す)

④卷四「九章」「悲回風」「聽波聲之洶洶」…欲懲清邪惡、復為讒人所危、俗人所謗訕也。(邪惡を懲清せんと欲すれども、復た讒人の危ふくする所、俗人の謗訕する所と為る也)

これら王注の「清澄」「懲清」が「悲回風」本文の「霧を激す」「江を清む」から直接来ていることは明らかであるが、讒佞や世俗を「きよめる」という「清」は、以降の系譜の中で「清潔」のテーマとどう関わってくるだろうか。

## V むすびに

小稿では、『楚辭章句』巻二～七に収められた屈賦諸篇の王注において、王注「離騷」テーマがどのように展開するかを見たが、以上のように、「離騷」テーマはほぼそのままの形で現れた。わずかに「去」「清潔」テーマに「離騷」王注には見られない概念が現れるが、それらも「離騷」テーマと異質といった性質のものではない。「離騷」を含めた巻一～七の諸篇は屈賦として一体の解釈が行われたことが窺われる。

これで、『楚辭章句』巻一～七まで、「離騷」を含めた屈賦全篇に付された王注の検討を終えた。巻八以降に収められるのは、屈賦の後を受けた戦国末から後漢にかけての楚辞である。巻七までに見られた「離騷」テーマは、これらの楚辞の意味世界を踏まえたものはずである。今後は、これまでの作業を受けて、「離騷」テーマを巻八以降の楚辞本文及び王注と突き合わせ、『楚辭章句』が示す屈原像の全容を捉える作業に入りたい。このことは、漢代の屈原像、ひいては後世における屈原像の祖型の把握に繋がるものと考えられる。

## 注

- 1 王逸『楚辭章句』に戦国の宋玉・景差ら、漢代の賈誼・劉向らの賦を収めることが示すように、屈原の後にその辞に習って創作された賦を総称して「楚辞」と呼ぶ。このため、屈原による創作とみなされた賦は区別のために「屈賦」(或いは「屈原賦」と呼ぶことがある。しかし、いずれの賦を「屈賦」と認めるかについては諸説ある。このため、小稿では王逸『楚辭章句』に拠って、屈原作と"みなされた"賦という意味で「屈賦」を使用する。なお、巻十「大招」は



王逸『楚辭章句』屈賦注における「離騷」テーマの展開（田宮昌子）

- 序に「大招者屈原之所作也。或曰景差。疑不能明也」とあるが、「大招」については稿を改めて検討することとする。
- 2 詳しくは、拙稿「悲憤慷慨の系譜—王逸注「離騷」にみる漢代屈原像—」（『中国 21』第 15 号、2003 年 3 月、愛知大学現代中国学会）参照。
  - 3 「屈原像の中国文化史上の役割：漢代における祖型の登場」『宮崎公立大学人文学部紀要』第 8 巻第 1 号、2000 年
  - 4 「序」「賛序」が王逸『楚辭章句』（現行本には巻一「離騷經章句」末と巻三「天問章句」末の二つの版本あり）に収められ、今に伝わる。
  - 5 『後漢書』『文苑傳』に「元初中、擧上計吏爲校書郎。…著楚辭章句行於世」とあり、現行本『楚辭章句』には各巻頭に「校書郎臣王逸上」の題辞がある版があることから、校書郎の任にあった元初年間に撰したものと考えられている。
  - 6 崔富章・石川三佐男「西村時彦对楚辞学的贡献-兼述中国人心目中的屈原形象-」（『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第 25 号、2003 年、108 頁）では、漢簡の残片があるとす  
るが、それ以上の記述はなく未詳。
  - 7 王逸『楚辭章句』のテキストとしての問題については、主に小南一郎『楚辞とその注釈者たち』「第四章 王逸『楚辭章句』と楚辞文藝の伝承」（朋友書店、2003 年）および崔富章・石川三佐男「西村時彦对楚辞学的贡献-兼述中国人心目中的屈原形象-」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第 25 号、2003 年を参照。
  - 8 蔣天樞「論《楚辭章句》」『楚辭論文集』陝西人民出版社、1982 年
  - 9 林維純「《楚辭章句》序文作者問題考辨」中国屈原学会編『楚辞研究』齊魯書社、1988 年
  - 10 小南前掲書、および崔・石川前掲論文など。
  - 11 宮野直也「王逸『楚辭章句』の注釈態度について」日本中国学会報第 39 集、1987 年
  - 12 前掲注 11 論文もその一つ。
  - 13 詳しくは、小南一郎『楚辞とその注釈者たち』朋友書店、2003 年、324～326 頁
  - 14 崔富章・石川三佐男「西村時彦对楚辞学的贡献-兼述中国人心目中的屈原形象-」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第 25 号、2003 年など。加筆として指摘されるのは、まず、字音を反切で示す部分。反切の成立は早くても後漢末とみられ、王逸当時に行なわれたとは考えられないためである（林維純「《楚辭章句》序文作者問題考辨」448頁）。また、「a は一に b に作る」という形で示される異文部分についても、後世の注の混入とみる見解がある。崔・石川論文は、『章句』は皇帝に上奏したものであって、簡潔を旨としたために引用文の出典も記していないほどであるのに、異文を列挙するであろうかと疑問を呈している(108 頁)。
  - 15 検索に当たっては、『文淵閣四庫全書電子版』（上海人民出版社、迪志文化出版有限公司）を使用した。
  - 16 前掲注 2 論文では、「（1）君への忠言（2）忠臣の願い」としたのを、小稿では「（一）君

- への訴え（1）忠言（2）戒め（3）登用の願い」に改め、サブテーマを六つから五つに整理した。
- 17 前掲注2論文においては、「忠臣の願い」としたが、願いの内容は「登用」であるため、本稿ではこのように改める。
- 18 小稿は、検索作業を『文淵閣四庫全書電子版』で行ったため、字句の異同については、基本的には『文淵閣四庫全書』に依拠することとするが、ここでは『四庫全書』版の「未時晩」を、洪興祖補注・竹治貞夫索引『楚辭索引・楚辭補注』（中文出版社、1972年）に拠り「未晏晩」に改める。
- 19 『四庫全書』版の「已」の中で一人称単数に相当する「已」については、前掲注18文献に拠り「己」に改める。
- 20 『四庫全書』版では「得若黄帝帝堯者」となっているが、前掲注18文献に拠り「徳若黄帝帝堯者」に改める。
- 21 『春秋左氏伝』哀公十一年に、孔子が衛国を去ろうとする時の言として「鳥則擇木、木豈能擇鳥」とある。
- 22 ここに引用するように、「前序」で<讒佞>と対になっている語は<忠貞>であるが、<貞>の「離騷」王注における出例は、<忠貞>2<貞賢>1を含め僅か4件で、王注世界の中心的対立軸の一方をなす語彙とは言い難い。本文および巻末の表に示す出例状況から、王注において「前序」の<忠貞>に相当するのが<忠賢>とみる。
- 23 <忠佞>の他に<賢愚>の出例があり、二項対立的構成を呈しているが、<愚>は道徳的に負の価値を持つ<佞>の語彙ではなく、優劣の対照の語彙として扱い、ここには含まない。
- 24 前掲注2論文における作業では、「不遇」テーマは<遇><當><世><時>で検索を行ったが、検索結果に鑑み、本稿の作業においては、<當><世><時>を除外し、新たに<遭>を加えた。
- 25 『四庫全書』版では「泉已」となっているが、前掲注18文献に拠り「泉耳」に改める。

王逸『楚辭章句』屈賦注における「離騷」テーマの展開（田宮昌子）

屈賦（本文）メインテーマ語彙出例表（％）

	文字数	登 用														平均	
		用		進		事		位		去		君		臣			
		出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度		
卷一離騷	2492	2	0.08	3	0.12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.03
卷二九歌	1564	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
卷三天問	1570	0	0	0	0	0	0	1	0.06	0	0	0	0	1	0.06	0.02	
卷四九章	4108	1	0.02	3	0.07	2	0.05	0	0	4	0.10	19	0.46	6	0.15	0.12	
卷五遠遊	1142	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
卷六卜居	321	0	0	0	0	1	0.31	0	0	0	0	0	0	0	0	0.04	
卷七漁父	211	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
平均			0.01		0.03		0.05		0.01		0.01		0.07		0.03	0.03	

屈賦（王注）メインテーマ語彙出例表（％）

	文字数	登 用														平均
		用		進		事		位		去		君		臣		
		出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度	
卷一離騷	10212	29	0.28	8	0.08	12	0.12	5	0.05	23	0.23	76	0.74	26	0.25	0.25
卷二九歌	5969	0	0	1	0.02	2	0.03	3	0.05	5	0.08	16	0.27	3	0.05	0.07
卷三天問	5954	2	0.03	0	0	4	0.07	3	0.05	0	0	11	0.18	4	0.07	0.06
卷四九章	9658	14	0.14	4	0.04	16	0.17	8	0.08	12	0.12	94	0.97	18	0.19	0.24
卷五遠遊	2054	0	0	1	0.05	0	0	1	0.05	1	0.05	2	0.10	0	0	0.04
卷六卜居	291	0	0	1	0.34	1	0.34	0	0	0	0	1	0.34	0	0	0.15
卷七漁父	162	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平均			0.06		0.08		0.10		0.04		0.07		0.37		0.08	0.11

凡 例

- ・出例の検索に当たっては、『文淵閣四庫全書電子版』（上海人民出版社、迪志文化出版有限公司）を使用した。
- ・表中の「出例」「頻度」は、それぞれ本文で説明する「該当出例」「出例頻度」に当たる。

屈賦（本文）派生テーム語彙出例表（％）

文字数	忠 ← 佞						不 遇			孤 高			清 潔			平均		
	忠		賢		佞		忠	遭		衆	独		清	潔				
	出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度		出例	頻度		出例	頻度		出例	頻度		出例	頻度
卷一離騷	2492	0	0	2	0.08	1	0.04	1	0.04	0.02	4	0.16	5	0.20	0	0.02	0	0.02
卷二九歌	1564	1	0.06	1	0.06	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
卷三天問	1570	1	0.06	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
卷四九章	4108	9	0.22	2	0.05	0	0	8	0.19	0.12	10	0.24	9	0.22	0	0.01	0	0.01
卷五遠遊	1142	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.09	1	0.09	0	0	0	0
卷六卜居	321	2	0.62	1	0.31	0	0	2	0.62	0.39	0	0	0	0	0	0.31	0	0.31
卷七漁父	211	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.95	2	0.95	0	0.48	0	0.48
平 均			0.14		0.07		0.01		0.13	0.09		0.21		0.21		0.23		0.12

屈賦（王注）派生テーム語彙出例表（％）

文字数	忠 ← 佞						不 遇			孤 高			清 潔			平均				
	忠		賢		佞		忠	遭		衆	独		清	潔						
	出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度		出例	頻度		出例	頻度		出例	頻度		出例	頻度		
卷一離騷	10212	48	0.47	55	0.54	23	0.23	22	0.22	0.37	5	0.05	1	0.01	0.03	20	0.20	10	0.10	0.15
卷二九歌	5969	7	0.12	7	0.12	2	0.03	2	0.03	0.03	2	0.03	2	0.03	0.03	2	0.03	2	0.03	0.03
卷三天問	5954	3	0.05	9	0.15	2	0.03	4	0.07	0.08	2	0.03	0	0	0.02	0	0	0	0	0
卷四九章	9658	65	0.67	36	0.37	25	0.26	27	0.28	0.40	10	0.10	5	0.05	0.08	36	0.37	9	0.09	0.23
卷五遠遊	2054	3	0.15	4	0.19	1	0.05	1	0.05	0.11	1	0.05	2	0.1	0.08	1	0.05	1	0.05	0.05
卷六卜居	291	1	0.34	2	0.69	2	0.69	1	0.34	0.52	0	0	0	0	0	2	0.69	0	0	0.35
卷七漁父	162	2	1.23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.62	1	0.62	0.62
平 均			0.43		0.29		0.18		0.15	0.26		0.04		0.03	0.03		0.28		0.13	0.20